平和資料館 草の家だより
No.172
2026年9月10日発行

草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail grh911@dream.jp HP http://www.maroon.dti.ne.jp/kusanoie/

憲法９条の風を県下に吹かせよう‼

９条の碑をつくるこうちの会「第２回総会と講演会」を開催

「９条の碑をつくるこうちの会」事務局長　岡村 啓佐（草の家 副館長）

６月 21 日「9 条の碑をつくるこうちの会」第 2 回総会が開かれました。オープニングに「平和でなきゃ音楽を楽しめない」と県下各地で沖縄音楽を届けている高知県沖縄三線愛好会の皆さんに出演していただき大好評でした。


「憲法噺」する八法亭みややっこさん

記念講演は八法亭みややっこさん（飯田美弥子弁護士）による「歴史に学び、未来を志向する日本国憲法」と題しての記念講演。講演は落語調で、難しい内容を分かりやすく、最後まで笑いの絶えない楽しい講演でした。参加者は改めて日本国憲法の素晴らしさと、高市首相の「戦争する国づくり」をストップさせようと気持ちを一つにしました。

第 2 回総会では、高市政権の平和憲法を無視した軍備増強の流れに不安を強め、９条の碑の建立に大きな期待が広がっていることなどが紹介されました。また、９条の碑制作チームが始動しデザインの具体化が始まっています。碑の建立は 2027 年の 11 月 3 日を軸に進めていきます。

総会後の幹事会において、９条の碑は高知市の公園に建立する事に意味があり、幅広い市民運動として進めていくために署名運動を展開することを決めました。碑をつくる会の事務局を担う草の家として全力で取り組んでいきますので皆さんの力添えよろしくお願いします。



「9 条の碑をつくるこうちの会」前半の司会を務めて頂いた鈴木 実紗（高知大学教育学部 社会科コース）さんより感想を寄せて頂きました。

参加は初めてでしたが、会場の椅子が足りないほどの参加者で、関心の高さと熱気を肌で感じました。初めての司会ということもあり緊張しましたが、皆さんの温かい雰囲気に支えられ、なんとか務めることができました。

文化行事では高知県沖縄三線愛好会の方々による演奏があり、「ゆいゆい」や「涙そうそう」など沖縄の音楽を聴くことができました。三線の優しく温かみのある音色、力強い歌声、参加者の皆様の手拍子や振付があり会場の雰囲気をより親しみやすいものにしていてとても印象に残りました。

メイン企画では八法亭みややっこさんによる「憲法噺」、落語の語り口で憲法について説明されていたため、これまで難しいという印象を持っていた憲法を身近なものとして考えることができました。日常生活では憲法について意識する機会は少ないからこそ、自由や人権が保障されている背景には憲法の存在があることを改めて理解できました。

2026 ピースウェイブ in こうち　アラカルト

✧　「第 48 回戦争と平和を考える資料展」（6/27～7/5）

「平和資料館・草の家」館長　出原 恵三



高知市立自由民権記念館・自由ギャラリー

今回の展示品では、政府による「国家情報会議」設置法との関連で、戦時中に国民監視のために作られた「防諜紙芝居」を 20 枚、日露戦争で戦死した一人の兵士の葬儀に際し寄せられた 35 通の弔詞（弔辞）、歩兵第 44 連隊兵営や同連隊も参加した陸軍特別大演習の大判写真、中国の万人坑写真、戦火の絶えない中東について西谷文和氏撮影の写真も数多く展示、来館者は 380 名でした。兵士に寄せられた弔詞については後日 NHK が取材しテレビ放映されました。

✧　「第 44 回平和七夕まつり」（6/28～7/26）



京町商店街での吊上げ作業

今年の「平和七夕まつり」は学校や福祉施設で折られた折鶴が 35 束届けられました。折鶴の束の下には思い思いの平和を願う言葉が記された短冊が付けられています。6 月 28 日(日)17 時から例年のように京町アーケードで新婦人や教職員など市民団体の協力を得て吊り上げ作業を行いました。作業終了後、「ピースウェイブのスタートの集い」が開かれ、岡崎清恵実行委員長の平和を希求する力強い挨拶の後、高知センター合唱団の皆さんのリードで「青い空は」「折り鶴」など 40 名余で歌声を響かせました。

✧　「なぜ中東で戦争が終わらないのか」西谷文和氏講演会（6/27）

平和な未来を考える高知の会　田村 和之

台風 7 号の最接近で、当日朝まであたふたしましたが、無事飛行機が飛び、西谷さんは来高されました。そして、台風通過で天気も晴れ、120 人もの来場者で、会場（自由民権記念館）は溢れました。

講演は、西谷さんご自身取材の動画を駆使したもので、簡潔で大変わかりやすいものでした。今年 2 月のガザの様子を（もちろんイスラエル側から）最接近でとらえた映像、ガザへのジェノサイドやヨルダン川西岸地区への強硬入植に対するイスラエル国内のユダヤ人によるネタニヤフ行動などと同時に、ガザ地区ジェノサイドの発端となったイスラエルでの野外コンサートでの犠牲者 364 名の一周忌の様子も紹介されました。

さらに、ハマス攻撃はネタニヤフの企てによるガザ・西岸地区分断作戦の延長であると話され、様々なフェイクニュースによって人々は騙されているとも話されました。アンケートでは、そのフェイクニュースに惑わされず、まず正しく知ること、関心を持ち続けることが大事だとの意見も多くありました。最後に、アフガニスタンの中村哲さんの功績を紹介し、「北風と太陽」の太陽政策が大事で、日本は、タリバンも知っている「九条」の第三の方法により世界平和に尽くすべきだと訴えられました。



高知市立自由民権記念館・民権ホール

✧　「第 42 回高知平和美術展」激励や共感の感想（6/30～7/5）

高知平和美術会会長　斎藤英男

6 月 30 日㈪～7 月 5 日㈰の間、高知県立美術館県民ギャラリーにおいて、第 42 回高知平和美術展を開催しました。出展者は 59 名、絵画、彫刻、書道、写真、工芸、短歌など計 90 点を展示披露しました。

ストレートに戦争や平和を表現したものから、家族や風景、草花などの自然、心象風景など自由な主題、表現のもので計 90 点が会場を埋めました。

特別企画展として「漫画に見る戦争と平和」のコーナーも設けました。梅雨で雨の日が多かったのですが、来場者は 432 名と昨年を上回る盛況でした。



高知県立美術館・県民ギャラリー

感想文も 50 枚ほどで、「日常の何気ない風景に平和を感じた」「心の平安をまわりに広げていく営みの中に世界の平和があることを痛感した」「平和を願い行動する人がいる限り、この国は大丈夫、ともに頑張りましょう」など、この美術展の存在意義に迫る激励や共感の感想が沢山あり、今後もこの取り組みを続けていく上での勇気を頂くことのできた美術展でした。

✧　「第 39 回 反核平和コンサート 2026」希望を感じたコンサートに

反核・平和コンサート実行委員長　柳井トモ子
（新日本婦人の会・高知市支部）



高知県立県民文化ホール・グリーンホール

今年の平和イベントは、日本政府による武器輸出を可能にし、敵基地攻撃能力を備えたミサイル配備、安保法制の改悪など平和憲法と逆行する動きの中での取り組みでした。

これら政府の動きをとらえて、全国各地でペンライトデモやサイレントデモなど多彩な抗議活動が継続的に行われています。反核・平和コンサートもその延長線で実施され「平和」を願う思いが従来になく大きいものがあったように感じました。

子ども達の懸命な太鼓演奏に平和な未来を渡す事が私たち大人の役割だと改めて思いを強くしました。『僕たちは黙らない、届け憲法。響け九条』、『戦を止める、幾千の声で、平和はきっとすみわたる』と力強い合唱に希望も感じた今年のコンサートでした。

平和や権利は与えられるものではなく、私たち自身が日頃からたゆまぬ努力を持って守り、育て続けなければならないもの「不断の努力」が更に重要になっています。

平和を願う巾広い人達とつながり合って憲法改悪を許さず、戦争による犠牲者を二度と出さない政府を作っていきましょう。

「第 29 回戦争遺跡保存全国シンポジウム・土佐清水大会」開催

=「戦争の実相を真正面から捉え、どのように次世代に継承していくか =

戦争遺跡保存全国ネットワーク代表委員　出原恵三（平和資料館・草の家館長）



8 月 22 日（土）の午後から 24 日 (月)まで四国の西南端土佐清水市の中央公民館を会場に全国シンポが開催され、全国から延 250 人が参加した。

初日は地元の黒原一寿実行委員長の挨拶、橋本敏男清水市長の歓迎挨拶の後、記念講演、基調報告、地域報告（2 本）、「令和 8 年熊本地震」戦争遺跡被災状況の報告があった。

記念講演は今回の全国シンポの事務局長でもある田村公利氏が「少年万次郎を育んだ故郷土佐清水」と題し、14 歳の中浜万次郎が、なぜ地域を出なければならなかったのか、「漂流譚」の背景には、中浜浦を本拠にしたカツオ漁・鰹節加工の盛行、流通販売での山城屋の隆盛という近世後期の土佐清水における浦社会の構造があったことに触れ、ホイットフィールド船長と出会い人間愛について言及した。



基調報告する出原恵三代表委員

基調報告は「戦争遺跡の保存と課題 2026」と題して出原が行った。本年 7 月現在で確認できた戦争遺跡の文化財指定・登録は 396 件（昨年 390)、注目される動向として「松代大本営平和祈念館」が 30 年余の運動を経て昨年 10 月に開館したこと、韓国において戦争遺跡ネットワークが結成され第 1 回全国シンポが仁川広域市の富平で開催されたこと、東京築地市場跡遺跡で進められている調査で明治期の旧海軍関連遺構が多く検出されていることなどを紹介した。喫緊の課題として自衛隊敷地内の戦争遺跡が解体、消滅の危険に晒されていること、略奪文化財への迅速な対応の必要性を訴えた。日本が一連の侵略戦争に対する総括がない中で、再び危険な道に踏みだそうとしている今、戦争遺跡はその警鐘の役割も担っていることを指摘した。



地域報告する松村信博（戦争遺跡保存ネットワーク高知、平和資料館・草の家事務局員）

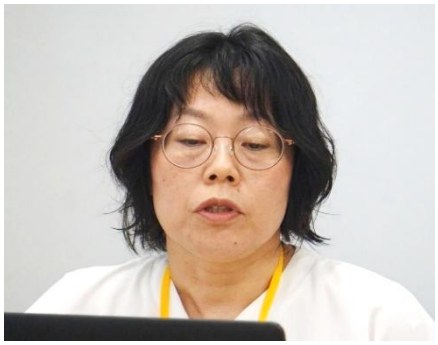
地域報告の 1 本は松村信博氏による「高知における戦争遺跡の動向」で、高知県の戦争遺跡の紹介と保存運動の歴史、近年刊行の市町村史に見られる戦争遺跡の記述について紹介があった。

2 本目は多賀俊介氏による「広島からアジア加害の戦争遺跡保存を考える–大久野島毒ガス製造遺跡を中心に–」で、「原爆ドームは〈被害の戦争遺跡〉という視点で良いのか」と問いかけ、戦争遺跡をアジアの視点から見直す必要性を指摘した。日本の侵略戦争の加害の側面が端的に現れている大久野島毒ガス工場跡の紹介と保存の重要性、昨年秋以来進められてきた保存の取組み、行政側の消極的対応などについて報告した。

「熊本地震」戦争遺跡被災状況について熊本の高谷和生氏が緊急報告した。被災戦争遺跡として機銃掃射痕の残る「永代橋梁」、「軍人像」などが挙げられるが全体把握に至っていないこと、復旧過程で関連資料の廃棄が行われる可能性大で、レスキュウー活動カンパへの訴えがあった。

全体会終了後、18 時からは会場を市内の「珉宝」に移して交流会を行った。市長、教育長も参加し、伝統芸能である「バラ抜きぶし」（無形文化財）や「土佐清水太鼓」などが披露されるなど大いに盛り上がった。

23 日は午前・午後を通して第１～３の分科会（①「保存運動の現状と課題」 ②「調査の方法と保存整備の技術」③「平和博物館と次世代への継承」）があり計 13 本の報告があった。高知県関係では、第２分科会で「草の家」の横山藍氏が「高知市朝倉陸軍墓地忠霊塔の建造物調査」と題して、建築学的な視点から旧陸軍墓地忠霊塔についての研究成果とともに 2 年前から進めている納骨堂内部の遺骨壷調査について報告、第３分科会で津野奈緒氏が「地域に残る戦争遺跡から学び伝える」と題して宿毛湾宇須々木にある旧海軍基地跡をスライドで紹介し幡多高校生ゼミナールの活動、自身の職場である医療生協が行ってきた戦争体験者からの聞取り調査について報告した。



分科会で報告する
横山藍（平和資料館・草の家理事）

同日 15 時から行われた閉会集会では、各分科会報告の後、「『新たな戦争遺跡』を作らないために『加害』を含めた戦争の真実と平和への想いを次世代に継承」し全国各地で展開している保存運動の教訓に学び「二度と戦争を起こさせない活動を前進させる」ことを誓う大会アピールを読み上げ採択された。

24 日は現地見学会で、大型バスに 40 余人が乗り込み 8 時 20 分に市役所を出発、第 132 震洋隊越基地跡に向かった。現存する 13 基の横穴壕を前に「震洋特攻」、壕掘削には強制動員された朝鮮人労働者が多数従事したこと、横穴壕全てが 2024 年に市史跡となったことなどの説明があった。ついで美しい海岸線を見ながら約 1 時間走り、宿毛市宇須々木の戦争遺跡に到着した。昭和初期から海軍の泊地として利用され、アジア太平洋戦争末期には特攻隊司令部の第 21 突撃隊本部が置かれたところである。昇降用階段、係留リング、巨大貯油庫、横穴壕など残存遺構から戦争の変遷を辿ることができる戦争遺跡群である。

松田 凜（高知大学人文社会科学部　人文社会科学科人文科学コース 4 年）

第 29 回戦争遺跡保存全国シンポジウム土佐清水大会 3 日目の現地見学会に参加しました。



見学会では、戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表の出原恵三さんの解説のもと、土佐清水市の第 132 震洋隊越基地跡と宿毛市の旧日本海軍基地跡を訪れました。震洋の格納壕や旧日本海軍の燃料庫、油倉庫などの遺構を見学しました。当時の面影を残す遺構を実際に見ることができたことは、とても貴重な体験となりました。

今回の体験を通じて、「戦争遺跡をどのように次世代へ継承していくか」について改めて考えました。バスツアーの道中では、出原さんから基地建設の背景について説明がありました。

出原さんによると、アジア・太平洋戦争期には壮年の日本人男性の多くが戦地に赴いていたため、こうした基地建設には朝鮮人の労働者も動員されたそうです。苛酷な労働環境であったため、命を落とした方々もいたといいます。戦争遺跡は、このような人々の犠牲の上に存在していることを忘れてはならないと感じました。

日本は原爆や空襲を受けた被害国であると同時に、アジアの諸地域を侵略した加害国でもありました。戦争遺跡は、アジアをはじめとする多くの国や地域との関わりのなかで生み出されたものです。そのため、戦争遺跡を保存し、その歴史的背景や意味を正しく理解しながら次世代へ継承していくことは、日本のみならず、世界にとっても大きな意義を持つと感じました。

戦争の惨禍を二度と繰り返さないためにも、日本の過去を忘れることなく、その歴史と向き合い続けていきたいと思います。

第 29 回戦争遺跡保存全国シンポジウム・土佐清水大会
分科会発表　～ 地域に残る戦争遺跡から学び伝える ～


分科会報告する津野奈緒さん

「戦争遺跡保存全国シンポジウム・土佐清水大会」の分科会では、四万十市在住の津野奈緒さん（戦争遺跡保存ネットワーク個人会員・高知医療生活協同組合に勤務）が発表、感想と発表の一部をご紹介します。

「戦争遺跡保存全国シンポジウム」に参加し、この四国西南端に残る戦争遺跡と地域での活動を発表させていただきました。

宿毛市宇須々木には 1936 年ごろから終戦直前までに作られた戦争遺跡が、まとまって残っています。しかし保存がされておらず、年々戦争遺跡は腐食が進んでいる状態です。また昨年、戦後 80 年が経ち、戦争体験者から直接体験談を聞くことも難しくなっている中で、体験談を記録し伝えていこうと、勤務する高知医療生協で聞き取りをすすめ、今年“平和な未来へ繋ぐためのメッセージ”という冊子にまとめました。（写真・下）



話を聞かせてくれた土佐清水市足摺の畦地さん（写真・左）は、当時小学生でしたがとても詳しく覚えていました。ひと山超えたところにあった海軍基地では、50 人ほどの朝鮮人が港から山の上まで資材を運んでいたそうです。ご飯もろくに食べさせてもらえずに重労働を強いられ、「日本人の偉いてが朝鮮人の奴隷をだんだんぷっ叩いてぷっ叩いて、可哀相やった。日本人はほんまに残酷なと思うたよ」と、当時小学生だった畦地さんが見た強制労働のことを話してくれました。この冊子には県内 28 人の方の戦争体験談が収録されています。それぞれが過ごした戦中戦後、その人の人生が記録されています。戦争体験の記録を残す活動は今しかできない大事な活動です。ぜひ手に取って読んでいただき、子や孫へと伝え繋いでいってほしいです。

そして戦争体験者が減っていく中で戦争遺跡の存在意義を考え、保存し残していくことの必要性を感じ、現在宿毛市に残る戦争遺跡の保存活動への準備をしています。また、自分たちも学習し地域住民に知ってもらうため、今年 2 月には「幡多探究ゼミナール」という生涯学習サークルを発足させ、セミナーなどを開催しています。

全国各地で何十年も長く活動を続け、証言や写真などの貴重な資料を集めて、やっと平和資料館や記念館ができたという発表を聞きました。若い世代へ継承していくために参考になる事も多かったのですが、同時に人口減少と高齢化が進む地域での難しさも感じました。自分の活動はまだまだ最初の一歩でしかないけれど、続けていくことの大切さを感じた貴重な機会になりました。



《書籍に関する問い合わせ先》
〒780-8065 高知県高知市ロ細山 206－9
高知医療生活協同組合　本部事務局・植田
TEL:088-843-0025　FAX:088-840-0649
E-mail: h.ueta@kochi-iryoseikyo.jp

槇村浩と私　　〈 寄稿 〉

中村貴美子（平和資料館・草の家　会員）



第 6 回槇村浩碑前祭（6/1）

6 月 1 日、槇村浩の碑前祭に参加が叶い、病院から退院したばかりの私は、それだけでも内なる喜びに満ちていた。
かつての日本国における法律がどのようにしかれて、人間が「集団の圧力」や「国家の命令」を個人の良心や普遍的な道徳よりも上位に置き、人間の「良心」を国家の「道具」にすり替えた経緯。国民全員を「監視員」に仕立て上げ、社会全体を恐怖で支配した過去をふり返る。
又、法律は人間の心と体を奴隷にするための檻へと変わっていったのか。その人間の支配欲が法律という衣をまとったとき、悪魔的に働き、いかに容易に国民全体を狂気へと駆り立ててしまうかを示す人類歴史上の非常に重い教訓となり、深い慟哭を覚えます。


墓前祭にて（9/3）

被爆者を生み出した現実から、いかなる知性ある宗教者であっても盲目になりえる歴史の事実を、人間たる事を改めて、今を生きる意義が問われます。
私にとって「人間の骨」の映画にある槇村浩の墓前祭は数十年の間の内なる願いでした。私はその間にキリスト者となり、深い感慨を覚えます。過去をひもとく言葉として、「連累と自尊性があります。私は祈りにて対応しています。「国民一人ひとりの記憶と警戒心に」将来はかかっています。槇村浩の日本詩歌史より天皇制のもとにあった和歌・短歌の人間性のひずみを知らされます。私は自身の中に短歌を終えざるをえなくなりました。

「たまきはる　たぎりにぎたつ　赤き灯に
ほのゆらしめん　吾が 姿見ん（拙歌）」



槇村浩墓前祭（9/3）

もう二度と武器を持ってこの大陸に来ないでください ‼



草の家の玄関脇に咲いているアサガオについてご紹介します。
「撫順（ぶじゅん）の奇蹟」を伝える「赦（ゆる）しの花」と呼ばれています。敗戦後 60 万人の日本兵がシベリアに抑留されましたが、1950 年にそのうちの約 1,000 人が中国に戦犯として引き渡され「撫順戦犯管理所」に収容されました。「管理所」での人道的扱いの中で戦犯たちは良心が目覚め加害を謝罪しました。釈放され帰国する際に看守から「もう二度と武器を持ってこの大陸に来ないでください。日本に帰ったら、きれいな花を咲かせて幸せな家庭を築いてください」と声をかけられ数粒のアサガオの種を渡されたのです。その後大切に育てられ「平和と友好」のシンボルとなって広がってきました。草の家では「万人坑」調査で著名な青木茂さんから 2024 年に分けてもらい綺麗に咲きました。

建立 17 周年を迎えた「津賀ダム平和祈念祭」

岡村 和彦（平和資料館・草の家事務局員）



高岡郡四万十町下道（JR 土佐大正駅から国道 439 号線を梼原町方面へ約 10 ㎞ 15 分程）のある津賀ダムの湖畔に建立されている「津賀ダム平和祈念碑」（2009 年 8 月 9 日建立）。

1941 年に着工した津賀ダム工事では約 200 人の朝鮮の人たちを強制連行によって見知らぬ山奥に集められ建設工事に携わりました。ダム建設は過酷な難工事となり多数の犠牲者が生まれたものの、周辺では少なくとも 20 基の無名簿が確認されていたとのこと。

1990 年、「幡多高校生ゼミナール（幡多ゼミ）」の高校生たちは先生とともに四万十町や地元住民など多くの人達が協力、戦争での日本の「加害の歴史」を明らかにしてきました。



来高した裵 愛蘭さん
（韓国・釜山市、写真右）

こうした取り組みを通じ「日韓合同でお花と線香をそなえる、ちゃんとしたモニュメントを作りたい」と、日韓での相互交流が始まり、デザインから資材の調達、仕上げまで作業を行い、銘板には日本語とハングル語で「ふるさと朝鮮半島に帰れなかった犠牲者のことを語り伝え、この地が国境を越えた友情と平和が広がる場所となりますように」と刻まれています。

建立 17 周年となる 2026 年 8 月 9 日、韓国から来高した 3 人を含め約 50 人が国境を越えての友情と平和を誓い合いました。なお「平和祈念祭」の後、昼食会や夜はカラオケ大会で日韓交流を行ったとの連絡が入っていました。

「平和資料館・草の家」創立 37 周年講演と祝賀会

日時：11 月 21 日（土）17:30～

会場：平和資料館・草の家





講演：「終わりなき闘い
日本軍『慰安婦』被害者の
人権と尊厳を取り戻すために」

李 相姫（イ サンヒ）弁護士
（通訳：金 英丸（キム ヨンファン） 氏）



※終了後に創立 37 周年祝賀会を行います（参加費 2,000 円）
ご参加の方は準備の都合がありますので、予めご連絡をお願いします